

皮を向いている。また賢治がもらってきたらしい。しゃり、しゃり、耳心地の良い音を聞いて、太宰は急に食欲が湧いてきた。太宰は白い皿の上に盛り付けられた林檎のひとかけらに手を伸ばそうとしたが、国木田にそれを阻まれた。

「どうしたのさ、国木田くん」

「どうしたのはこっちの台詞だ。お前、そんな指先に傷だなんて、どこでつけてきたんだ」

「傷？ そんな、私どこかでやったなんて記憶にないよ」

国木田に言われ、太宰は訝しげに自分の手を見た。その時一瞬、背中に氷の刃が突き刺さったような感じがした。これは、彼だ。彼の――

太宰の指先には、血液がべったりとこびりついていた。少し乾いて、酸化しているが、それは確かに血液だった。指同士をこすり合わせる、人間の皮膚の組織と、乾いた血液がぼろぼろと落ちる。太宰のものではない、誰かのものの血液と皮膚。心当たりは一つしか無かった。

「何か、手を拭くものを持って来て」

無言で指先を見続ける太宰の姿に何かを察したのか、国木田が席

を立つ。わずかに俯いて、流れた金色の髪から除く彼の首筋に、みずばれのような赤い痕を見たような気がした。そこかしこに夢をたどる路がわずかに残っている。しかし、夢は終わったのだ。あの悪夢をわざわざ辿るほど太宰は酔狂ではない。彼は死んだのだ。夢の中で、太宰が殺した。だからもう二度と彼に会うことはないだろう。もし再び会える時は――その時は、太宰が完全に獣になったときだ。恋を忘れ、愛を忘れ、ただ過去の怨念と亡霊たちにおびえながら生きる野良犬になつてしまった時だ。

医務室の窓辺で、白い花瓶に活けられたノブドウが傾きかけた金色の太陽の光に照らされている。それは、まるでこの世のものではない、夢のような美しさを、色とりどりの実に宿していた。